

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ミクロネシアの性的表現と人間関係

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5268

ミクロネシアの性的表現と人間関係

須藤健一

はじめに

ミクロネシアのトラックを中心とする中央カロリン社会（トラック語系社会）では、思春期の男女の性行動が自由に認められている。女性の処女性は何ら問題にされず、未婚の母やその子供も社会的差別や偏見を受けることはない。また、結婚後においても、男性は妻以外の女性と「秘密裡に」性関係をもちつことに情熱を燃やす。このような性の自由については、アメリカの研究者によってすでに報告されている（GOODENOUGH, 1949; GLADWIN & SARASON, 1953; SWARTZ, 1958）。彼らの視点は、自由な性行動が許されるトラック人の価値観を心理学的アプローチによって把握することであった。

本稿の目的は、トラック語系社会における人々の性に対する

る知識とその表現方法、性にまつわる禁忌とそれが適用される人間関係を記述することにある。この社会の性的禁忌の多くは、異性キョウダイ間に規定されている。そして、他者の異性キョウダイの性的事柄や性行動を口にすることは、極力慎まなければならない。性的発言が原因で殺傷事件に発展することもある。したがって、ここでは、異性キョウダイ間に規定されている性的禁忌とその侵犯に対する対処法に焦点を当てて記述する。

本稿の基礎資料は、サタワル、トラック、そしてモートロクの三社会で筆者が行なった調査で収集されたものである。ここでの記述はサタワル社会を中心にするが、他の二社会の情報も随時利用する。これら三社会は、母系の出自に基づいて親族集団を編成し、妻方居住様式を制度化している点で共通する。また、言語をはじめ多くの文化要素を共有しているので、「トラック語系社会」と呼ぶことにする。



1 思春期の性

サタワル社会で女性が「女」とみなされるのは、初潮直後に行なわれる成女式によってである。それは、五日五晩の月経小屋への隔離と六日目の朝のムラ入りの儀礼とで構成される。月経小屋へ入る時、初潮の女性は全身にウコンの粉末を塗り、初めて腰布をつける。ムラ入りの儀礼は月経小屋とムラの境界で彼女の父のリニージの老女からヤシの飾りを頭、頸、手足につけてもらい、祖霊に「よい女」になるよう呪文を唱えて祈願する内容である(須藤、一九八六)。少女が初潮を経験するのは一、二、三、四歳頃である。この儀礼を経て少女は「一人前の女」としての社会的承認を受けたことになる。彼女はタロイモ田の割り当てを受け、イモを自分で栽培し、機織りなどの仕事を一人で行なうと同時に、結婚が許される。それに対して、男性の場合は少年期から成年男性への移行を示す儀礼がない。父親は息子のココヤシの植栽、漁撈活動、ココヤシ縄の編み方などの技術を習得したとみなした段階で、島の酋長にその件を告げる。酋長は男性の集会の場で若者が「島の男」の仲間入りしたことを公にする。この報告が「一人前の男」になったことの社会的承認である。その年齢は、一八一二〇歳が目安になる。

現実の生活においては、男女とも一人前の成人に達する前

から性関係をもち始める。女性は初潮前から、男性は一歳過ぎからさかんに異性との交わりを求める。少女が性交に及ぶのは胸のふくらみと乳首の形が基準になる。少女が初潮前から性関係を経験したとしても咎められることはない。ある老女の話では、少女が初月経を出すには男と寝なければならぬといふことである。その相手は独身の男性でなくてもよく、既婚者、とくに、姉の夫などから性的な手ほどきを受けることがあると言われる。

少年のなかには、一六歳頃から性に積極的になり、特定の相手と関係をもち始めたりする者もいる。少年はそのことを友人に自慢げに話すため、大人の耳に入ることになる。しかし、彼の親にしる母方のオジにしる特別に叱ることはなく、「気の早い子だ」という見方をするだけである。また、人々もヤシ縄も作れないのに「女のことしか考えない子だ」と言っつて彼を揶揄する程度のものである。子供たちが性に目覚めるのは、夜、両親の性交を目撃したり、兄たちの手助けをしたり、若者の経験談を聞くからである。また、男たちがカヌー小屋で狼談をしたり、噂話をする場において性に関心をもつ大人たちは子供たちがいる前で性に関する話を控えたり、禁じたりすることはない。カヌー小屋は女性の立ち入り、禁じられるため、男たちは手仕事をしながらはばかることなく狼談に花をさかす。

思春期の男女の性行為は、昼間に森で行なわれる場合が多

い。少年が弟や甥に手紙を託したり、伝言の形で少女に会う場所を伝える。少女は機織りやタロイモ作りの仕事を母親や姉たちと一緒にこなすが、その目を盗んで男に会う。便所へ行くふりをしたり、イモを籠に入れて帰る途中で水浴びをすと言つては相手の待つ場所へ行く。また、少女が小さな子供を連れて森へ薪集めに出かける時はランデブーの好機となる。二人が落ち合うと、人目につかない木陰にヤシの葉を敷いて性行為に及ぶ。その間、少年は弟などを見張り役に立たせる。

若者が性関係をもつ相手は、思春期の女性だけでなく、寡婦の場合も多い。三〇―四〇歳代で夫と死別ないし離婚した女性のなかには、少年を夜家と呼び性関係をもつ者もいる。この場合、女性は相手を特定化せず、性そのものを楽しむことを目的としているようである。また、他島から来た独身女性がいたりすると、島の若者は彼女に接近する。彼女が投宿している家の人も若者の性を目的とする訪問には見て見ぬふりをする。

このように、若者は結婚を前提にして女性との性行為を行なうだけでなく、性そのものを対象とする女性と性関係をもつ機会がかなりある。そして、正式の夫婦関係を結んでいない女性が妊娠した場合、その子は「藪の中の子」と表現されるが、社会的差別を受けることなく母親のリニージ成員として正当な権利を獲得することができるといえる。

親たちは思春期の子供たちの性行動には干渉しないが、性関係を禁止する相手については一〇歳頃までにはつきり教えなければならぬ男性のことを覚えさせる。その男性と出会ったり、側を通る時には、女性は彼より一段低い姿勢をとることを義務づけられる。これはアッポロと呼ばれ、対象となる男性は実の兄弟のほか母系氏族の同世代の男性、母方交叉イトコおよび父方のイトコである。つまり、類別的男性キョウダイのカテゴリーに属する男性に對してである。したがって、アッポロをする相手との性交および結婚は禁忌である(須藤一九八〇)。少年は一〇歳を過ぎる頃からカヌー小屋で寝泊まりを始め、女性キョウダイと同じ敷地内の家に住むことを避ける。

トラック社会における思春期の男女の性行動は、ほぼサタワルのそれと同じである(GODENOUGH, 1949; GLADWIN & SARASON, 1953)。しかし、五〇年前までは、夜に男性が女性を誘い出すのに「夜這い棒」(Cane)が使用されていた。それは一メートルほどの棒の上部に精巧な刻みや彫刻を施したものである。男たちは昼間、気のある女性に会ったり、女性のいる前で自分の棒に触れさせたり、見せたりしてその印の特徴を覚えてもらっておく。そして、夜になって人々が寝静まった頃、男は好意をもつ女性の家へ向かう。彼女が家のどの部分に寝ているかを彼女から聞かなくても、独身の娘の

寝る場所はほぼ見当がつく。男は忍び足で娘の家に近づき、娘の寝ている外側に立ちヤシの葉で編まれた壁の隙間からその棒を差し込む。そして、棒の先端を彼女の髪にからませて引き、寝ている彼女を起こす。

彼女はその棒を握って彫刻が自分の好きな相手のものであるか否かを判断する。彼女は好意をもつ男性であれば、その棒を強く引く。これは、彼女の側に寝ている親や姉夫婦たちが寝入っているから家の中に入ってくるようにとの合図である。そして、彼女が棒を二、三度揺ると、外へ出て行くからしばらく待つようにとのサインである。親が気づかないように家を出るが、行く先を聞かれたら「便所へ行く」とその場を逃れる。しかし、女性は彫刻が自分の好きな男性のものでないとわかると棒を押し返す。これは気がないから立ち去るようにとの指示である。棒の彫刻や刻みでは相手が判断できない場合には、女性は低い声で「誰か」と聞く。それに対する返答の声で、彼女は自分の恋人か否かを確かめて前述の三通りの合図を送る。

現在、トラックやモーターロック社会にはココヤシの葉葺きの家がなくなり、家は合板ないしコンクリート製の家にルーバー式の窓をつける様式に変化した。そして、内部を仕切って個室を設ける家が一般的である。そのため夜這い棒の効力は失せてしまった。しかし、若者は夜に恋人を呼び出す方法をいろいろ工夫している。その一つは注射器の利用である。

これは金網を張った窓越しに、水の人った注射器で恋人の顔を直射する方法である。この方法は、ねらいを定めて一気に押さないと、水が分散し相手の側で寝ている人にもかかり、失敗の度合が大きいとのことである。

以上で述べてきたように、トラック語系社会では、若い女性の婚前の性交渉は親などからの格別の干渉もなく、自由に行なうことが許されているのである。ただし、インセストタブーのカテゴリーにある異性ととの性関係は厳格に忌避されており、そのタブーは同世代の異性間では敬語の使用、表敬行動の適用を義務づけられる異性ととの性交の禁止を意味している。

2 性器変工と性行為

サタワルの人々の性器に対する解剖学的知識によると、男性性器は男根 (*se*) と睪丸 (*serivan*) とに大別されるにすぎないが、女性のそれは七種類に及ぶ。性器全体はティギー (*tingiy*)、上部のふくらみはポラヌ (*poranu*) と呼ばれる。そして、小陰唇がフィル (*fin*)、尿道がファイチュチュン (*fai chuchun*、黒い石)、陰腔がバガラワン (*dangarawan*)、陰核がクメレルウン (*kumererhun*)、陰腔にある筒状の肉突起がヤニュー (*yanyu*、神の総称) とそれぞれ類別されている。これらの性器部位のうち性交にもっとも重要な役割を果たすの

は、小陰唇と陰核であると考えられている。

小陰唇は花卉にたとえられ、その二枚のひだを伸展変工することが女性のたしなみとされていた。現在でも五〇歳以上の女性は若い頃にこの変工を行なった経験がある。その変工は小陰唇を引き伸ばして生殖器の外部にはみださせることである。方法は、女性が海で水浴びをする時に、ある種の海藻やサンゴを生殖器にこすりつけて腫らせたり、池で水浴する際には毒性のある草や樹液をつけて肥大させるのである。また、蜂や蟻に刺させたり、噛ませたりもする。そのような痛みを伴う刺激を与えると同時に、排尿や水浴の折に、手で引っ張りながら肥大させる。ある話者によると、性交中に男性が小陰唇を吸うことで大きくするとのことである。いずれにせよ、女性にとっては小陰唇のひだを伸展させ、「ひらひら」の状態にすることが理想である。

この習慣はサタワルからモートロックにかけてのトラック語系社会に共通している。なかでも、ブルワット、ボンナツプとトラック諸島で発達している。三〇年前までは、それらの島の女性のなかには、伸ばした小陰唇に穴をあけ、ココヤシ殻の飾り（耳飾り）をつける者もいた。彼女が歩くことからという音が聞こえたと言われる。このような性器変工は、たんに性的興奮を高めるためだけでなく、次節で述べるように女性の間での争いや喧嘩の際に、当事者の優劣を決める手段でもあった。男性においても太くて強靱な性器をもつこと

が誇りとされ、小石で男根をはさみつけたり、搗いたりする方法がとられた。

サタワル社会における性交は、事前に性的高まりをもたらずような愛撫や手法を用いずに、直接的な交接が一般的である。男性の場合は、女性が腰布をずらしてあらわにした太股を見るだけで興奮を覚える。とくに、男性は五〇歳以上の女性が施している生殖器周辺から大腿にかけての入墨いれずみを目にするだけで十分な高まりをみると言われる。一方、この社会には、交接を指す言葉、フェ(fe)のほかには性的行為を表わす用語がある。それは女性が男根を口にくわえてなめる(numnu)、男性が女性の陰腔に舌をさしこむ(neueni)、陰唇を吸う(summea)、性器をなめる(angiy, muongo)、噛むないし食べるの意味、そして、男性が手で女性の性器に触れる(vatei)、逆に女性が男根を手淫する(viri)などである。

それらの行為はいずれも交接前の予技ではなく、交接を中断して行なったり、夫婦が性交を禁止される期間に実施するものである。この性交の禁止は妻の出産後、子供が言葉が話せるように成長するまでの二〜三年間、夫婦に義務づけられる。この禁忌を破ると子供が病気になると思われ、キリスト教に改宗する以前（一九五三年）まで厳格に守られていた。

サタワル社会の伝統的な性交体位は、側位と、男性が男根で女性性器を打ちながら刺激させ交接する形態との二種類である。側位は男女が向かい合って寝ながら抱き合い、足をか

らませて男性が腰を使う方法である。そして、性交後もそのままの形で眠りにつくこともある。これは夜、一軒の家の中で子供をはじめ、親夫婦、姉夫婦などが添寝をしている状態で性交を行なわなければならないという住環境に適した体位である。というのは、サタワルの家が土間形式で間仕切がないため、全家族員が一列に頭を並べ各自の真座（まざ）の上に横たわって寝るからである。他の家族員に気づかれなく性交をするためには、大きな動作をとらず、声も出さずに行なう必要がある。

もう一つの体位は、男性が座り女性が男性の方に股を開いておお向けに寝るものである。男性は手で男根を握り、女性の性器、とくに伸展した小陰唇にこすりついたり、陰核を叩きながら刺激を加える。この動作を続けているうちに女性の性器から体液が出て音をたてるようになる。そして、女性の興奮が高まり、頂点に達した段階で、男性は男根を挿入させ射精する。この体位で女性が最高のクライマックスの状態になると、失神して尿をもらす状態になる。もし、女性がクライマックスに至らないのに男性が射精してしまうことは、男性にとつては恥かしいことで「女に負けた」と表現される。女性はこの体位をもっとも好み、男性と性の強さを競争するのである。クライマックスに達しなかった女性は、笑うことによつて相手が負けたことを示す。

サタワルではこの体位による性交の頻度はそれほど多くな

いが、トラック社会ではこれが他の体位より優越している。とくに、性関係をもち始めた男女間では、女性が相手の性的な「強さ」を試すためにこの体位を好んで行なう。そして、女性は配偶者を決める際に、この体位による男性の性的能力を重視すると言われる。しかし最近、婚前に性経験のない新婚女性などは、男性に自分の性器を見せることを嫌う傾向が強くなってきている。いずれにせよ、男根で女性の性器を刺激する体位は、交接が射精のための行為であり、交接によつて女性の興奮を高めるのではない点の特徴である。つまり、男根で陰唇および陰核を打つことに性交の第一義的価値が置かれていくからである。

それら二体位のほかに、現在では男性上位や女性上位などの方法もとられている。男性上位の体位は、今世紀初頭に島に滞在したドイツのコブラ貿易商や日本統治時代に日本人によつてもたらされたようである。女性上位はフエナニ・ヤップ (Fenuani Yap) と呼ばれ、「ヤップ島式の交接」で、ヤップ人の好む体位を真似たと言われる。また、太平洋戦争中にマーシャル諸島へ行ったサタワルの男が、そこで経験した体位を「ヘリコプター式」と名づけて島の男たちに教えた。それは、女性上位の変形で、女性が、おお向けに寝ている男性の男根の上にながんで性交する体位である。男性は女性性器に男根を触れるために腰をもち上げる。しかし、女性がなかなか接触させないように前後左右に動くため、男性は腰を浮

かせた状態で、ちょうどヘリコプターの翼のように女性の下で向きを変えたり、回転する破目になる。この体位を試みた男性は、女性の言うなりになり、負けてしまうから「おそろしく良くないやり方だ」と述べていた。

以上で五種の体位について述べたが、サタワルの人々にとってもっとも好まれ、多く行なわれる体位は側位である。その体位での交接中に、男女が興奮を高めるために男性は積極的に女性の乳房や頸部を吸ったり噛んだりする。そして、女性がクライマックスに近づくと口を大きくあける。しかし、特定の言葉によって相互に刺激し合うようなことはない。女性性は極度に興奮したことを「頭が割れるようだ」と表現する。

3 性的表現の禁忌とキョウダイ関係

サタワル社会では、異性キョウダイ間に表敬行動や忌避行為などの多くの規範がある（須藤、一九八〇）。そのなかでも、性に関する事柄および言葉を口にすることはもっとも厳しい禁忌とされている。性器の部位名称、性交、抱擁など性行為を表わす言葉、愛人、姦通といった正式の夫婦以外の男女関係、さらに排泄についての表現がその禁忌に含まれる。また、女性は彼女の男性キョウダイに対して、太股およびそこに施した入墨（いれぼく）を見せなくてはならず、使用していない腰布も目に触れさせてはならない。さらに、彼女は彼らの耳に届く範

囲内で猥褻な歌詞を盛り込んだ歌を口ずさんではならない。

異性キョウダイ間に規定されているそれらの禁忌を破ると、祖霊によってリニージ成員に病氣や死などの災いをもたらされると信じられている。また、女性が男キョウダイに対する規範を守らないと、彼らがカヌーでの航海中に災難に遭遇すると考えられている。このように、行動規範を逸脱した場合に祖霊によって超自然的制裁が与えられるという信仰は、リヤ（*Liya*）と呼ばれ、サタワルの人々の日常的行動を律する基本となっている（須藤、一九八〇、石森、一九八五）。リヤの観念は、リニージの子供が原因不明の病氣になったり突然の死に至った場合に、誰それが前述の禁忌を破ったからだとの説明づけにも用いられる。

性に関する禁忌のうち、性器名称や性交行為を示す言葉を異性キョウダイ間だけでなく、対人関係一般において使用することも慎まなければならない。とくに、相手の異性キョウダイに関連する性的事項を相手のいる場で口にすることはゆゆしい事態を惹き起こすことになる。筆者も調査中に苦い経験をしたことがある。筆者の親しい友人A（性や罵倒表現についての情報提供者であるが）の姉に道で会った時、筆者は「Aは若い娘のことを考えて、あぶないよ」と彼女に話しかけたのである。軽い冗談のつもりであったのだが、彼女は急に厳しい表情になり、語気を強め「内地の人だから許してやるが、そんなことをサタワルの女の前で二度と言ってはなら



島の「貨幣」となる腰布を織る女

ない」と話して立ち去った。彼女の剣幕に圧倒されたが、その時に初めて、サタワル社会で男性の女性関係を彼の女性キョウダイに対して語ることの意味の重大さを痛感したのである。

他日、夕方の海岸で七人の男が輪になってヤシ酒を飲んでいる最中に、一人の若者が相手からんで「おまえの妹の陰核をなめろ」と口にした。すると言われた中年の男は側にあつた棒切れを掴み立ち上がり、若者を殴りつけたのである。周りの男たちは二人の間に入って制止しようとはせず、二人は取っ組み合いの喧嘩を始めた。二人は場所をカヌー小屋に移してお互いに蜜刀を持ち出し、性についての禁忌語を浴びせ合いながらにらみ合いを続けた。この騒ぎを聞いて多くの人々が集まってきたが、彼らはただ見守るだけである。そのうちに、禁忌語を吐いた若者のリニージの族長が腰布を三〇枚ほど集め、相手の男のリニージの族長のもとに届け、二人の族長の命令でその喧嘩はおさまった。そして、悪言を投げかけた男は、それ以後一年間ヤシ酒を作り飲むことが禁止されると同時に、五〇ドルの罰金を島の酋長に支払うことが課せられた。

サタワル社会での男の暴力的争いの原因は、ほとんどの場合女性キョウダイにまつわる性的禁忌語の発言によるものである。それに端を発する男性の争いは当事者だけで終始し、どちらかが傷ついた時に終わる。彼らのリニージの男性成員

であつても当事者でなければその争いには直接関与しない。男性成員は彼らの姉妹や母親に争いが起きていることを知らせる役目を負う。それを聞いた彼女たちは、リニージの女性成員から賠償品となる腰布を集めてその族長のもとへ持参し、喧嘩を終わらせるように懇願するのである。

他方、女性間においても彼女の男性キョウダイの性に關する「悪言」がもとで争いが起きる。たとえば、女性は、誰か（男性）が彼女の兄弟の性的悪口を言ったということを耳にすると、必ず仕返しをする。その方法は悪口を吐いた女の女性キョウダイに対して、彼女がその男の女性関係や性的禁忌語を浴びせるのである。つまり、女性は彼女の男性キョウダイが性からむ恥辱を受けた場合に、それを発言した男性の女性キョウダイに対して性的禁忌語を投げ返すことによつて、彼女の男性キョウダイの恥辱をはらすのである。もちろん、女性は噂ではなく、直接に相互の男性キョウダイの性的悪言を吐いて口論することもある。

このような異性キョウダイの性に係わることの言及を忌むという習慣は、トラックやモートルロックの社会にもみられる。トラック社会での日本の言語学者S氏の失敗を紹介しよう。トラック語研究の第一人者であるS氏は、店でフィルムを求めた。彼はフィルムが日本語からの借用語で、トラック語ではフィルムム (*filmum*) と発音することを知っていた。そこで女店員に「フィルムムをください」と流暢なトラック語

で話しかけた。すると、彼女は顔を真青にし店の奥へ逃げ込んでしまった。マネージャーが現われ、「おまえは一体何てことを言う。彼女の兄弟でもいたら大変なことになる」とどなりつけたのである。S氏は友人に事の顛末を話し、フィルムウ (*Filmu*) はトラック語で「あなたの陰核」を意味することを知って肝を冷やしたとのことである。以後、S氏には英語発音の *pin* というニックネームがつけられた。

S氏の場合は、渾名をつけられただけで難を逃れたが、トラック社会では女性性器の名称を口にすることが原因で殺傷沙次に発展することがある。二年前に起きた事件は次のようなものである。

一人の男(X)が酒を飲んでシンセキの家に乱入した。イトコにあたる男(Y)が酒びたりの彼を叱責したために口論になった。平常心を失ったYは酒飲みの男に「おまえの姉さんに性的なことをやれ」と罵った。ちょうどその家にXの姉がいたこともあって、Xは激怒し持っていたナイフでYを刺し殺してしまつたのである。この殺人事件は法廷で裁かれることになった。日系ハワイ人の裁判長は、被告の発言したことの意味とトラックの慣習法における位置づけを理解するために、教育省言語局のスタッフに参考人として意見を述べるように依頼した。

参考人はXとY双方のシンセキであり、自分の女性キョウダイをはじめ多くの親族が傍聴している前で、事件の状況や

発言内容をありのまま陳述することにはためらいを感じ一度は拒否した。しかし、彼は事件の場に同席していたことでもあり裁判長の依頼を承諾したのである。その発言の意味は「小陰唇を吸え」というもので、慣習法では「犯せ」という禁忌語の次に「重い罪」になる。その裁判はまだ結審していないが、参考人の意見によるとトラックの男性はそのような言葉を耳にすれば、言った相手を殺害するのが「当然である」とのことである。この事件の場合、争いの場に当事者の姉がいたという最悪の状況が重なつたのである。

トラック社会では、この事件のように、男性間で相手の女性キョウダイの性に関する事柄を口にすることは *fiji nee nuaa* (フィー・フィー・ネエ・マス) と言われ、「目の中に稲光をさせる」、つまり「目に電光を走らせる」という意味である。

男性間で彼らの女性キョウダイに対する性的凌辱は、死に至るほどの事件になるが、女性間でも彼女たちの男性キョウダイの「性的悪口」を言われた場合に、それに決着をつけるべき争いが起こる。この悪口とは男性キョウダイの性的行動に関することである。たとえば、相手の女性の兄や弟が「愛人」をもっているとか、女に夢中になっているとか、「惚れ薬」を使っているなどの内容である。女性は、男性キョウダイの性にまつわる言葉を直接言った相手(女性)だけでなく、他者が口にしていたことを間接的に聞いた場合でも、発言した相手ないし相手(男性)の女性キョウダイに攻撃的態度をと

る。

そのような意味の言葉を言われた女性は、言った相手に対して、「おまえの小陰唇の花びらが小さいのにそんなことを言えたものだ」と啖^{たん}阿^あを切る。そして、二人はお互いに性的な言葉で罵り合い、最後にはスカートをまくり上げて伸展変工した小陰唇のひだの大きさを比べ合う。第三者の立ち合いのもとに、そのひだの性器外部への出具合で二者の勝ち負けを判定する。女性間で性器を露出するほどの激しい争いは、彼女たちの男性キョウダイの性的行動についての発言に起因する。トラックの女性にとって、彼女の男性キョウダイが性的侮辱を受けることは、もっとも許せないことであり、彼らの名誉を回復させるためには自分の性器をあらわにする行動をとるのである。ただし、すでに述べたように、最近では小陰唇の伸展を美とする考え方が衰微したため、この種の激しい喧嘩は五〇歳以上の女性によってのみ行なわれている。

4 配偶者以外の性

サタワル社会においては、男女とも自分の配偶者以外の異性と特定の期間に限り性関係をもつことが認められている。その異性とは、夫にとっては妻の女性キョウダイ、妻にとっては夫の男性キョウダイである。それらのキョウダイは、個人にとって関係名称のうえでは配偶者と同じくプヌッ

(*puunuu*)の用語で指示される(須藤、一九八〇)。配偶者の同性キョウダイとの性が許されるのは、自分の配偶者が長期間島を留守にする時である。

島の男たちは現在でもカヌーで他島へ航海し、その島に数カ月滞在する。その期間彼らの妻たちは夫の親の家へ移り、彼のリニージ成員と生活を共にする。そして、彼女は夫の独身の男性キョウダイがいれば、そのうちの一人と性関係をもつことが許される。その場合、夫の実の兄弟が優先される。

しかし、夫が帰島すればその関係は終結する。逆に、妻が他島にいる親族の病気見舞などで島を離れている間、夫は妻の姉妹(独身)と性関係を結ぶことができる。

配偶者以外の異性との性関係が社会的に承認されているそのような慣行とは別に、男性は妻以外の女性と「恋人」ないし「愛人」の約束をし、人目を盗んで性的行為に及ぶ。この関係はアマレル(*amarell*)と呼ばれ、男性にとっては愛人をもつことが「自慢」とさえなっている。愛人は他人の妻、寡婦そして未婚の女性である。とくに、男が他島へ航海に出ている間とか出稼ぎの期間にその妻と一時的な愛人関係を結ぶ場合が多い。現在ではキリスト教によって離婚が禁止されているが、三〇年前までは愛人関係から夫婦へと発展した例が数多くあった。その当時はまた、妻の出産で夫婦の性交が禁止されていた二―三年の間、夫は他の女性と性関係をもつことに積極的であった。

愛人関係は秘密裡に維持される限り問題にはならない。しかし、愛人関係にある男女が、性交現場を発見された時には、当事者および彼らのリニージは、社会的、経済的に大きな制裁を受けることになる。それは「他人の女を盗んだ」と表現され、「姦通」(yemorow)とみなされる。姦通は男女が二人とも既婚者である場合に経済的に悲惨な事態が生じる。姦通が発覚した男女それぞれのリニージは、彼らの妻ないし夫のリニージの成員によって多くの財産を没収ないし差し押さえられる破目になる。リニージの男性成員の姦通によって「被害」を受けた長老の経験では、差し押さえられた大型カヌーは腰布を賠償に返却してもらったが、小型カヌー、漁具から衣類、斧、鍋にいたるいっさいの家財を持ち去られたとのことである。その日から料理も作れないので、持ち去ったリニージに謝りに行き、鍋を一つだけ返してもらう恥かしい目に遭ったとも述べていた。

一九三一年から六年間サタワルに滞在した土方久功は、姦通が原因の家財没収事件を一二例も報告している(土方、一九八四)。筆者も土方とは別に五つの事例を得ている。このことから、キリスト教による規制を受ける前のサタワル社会においては、多くの姦通事件が発覚していたことがうかがえる。改宗後、姦通に端を発する家財の没収騒動は一例もないが、男性が正式に離婚しないで愛人をつくり、彼女と同居している例がある。そのために男性のリニージでは、その男の

妻(他島出身)のリニージ成員が押しかけて来るのではないかと、連絡船が巡回するたびに戦戦恐恐としていた。

キリスト教に改宗後、サタワル社会で愛人関係をもつ男性はそれ以前と比べると少数になってきた。その反面、他島の女性と比較的自由に性関係をもつ傾向は現在においても強くみられる。それは、カヌーで他島を訪問した時に、他島の未婚女性と関係するものである。この島の男性が他島の女性との性関係が大らかであるということは、「女性の貢献」(Jawa roowunt)の慣行にも表われている。これは、サタワルの女性たちが、他島からカヌーで訪問してきた男たちに食料を提供し、性的サービスをする歓迎方法である。

他島から男たちがカヌーで訪れ滞在している間、この島の女たちは数組に分かれ、カヌー小屋で寝起きしている客人(男)に毎日料理を届ける。食物の贈与は、女たちが隊列を組み片手にタロイモやパン果の食べ物の入った皿を持ち、卑猥な歌を合唱し道中をねり歩きながらカヌー小屋へ向かって客人に手渡すのである。そして、客人の一人一人に皿をあげる時に、客に性的挑発を仕掛ける。その挑発ぶりは歌の歌詞からも知ることができる。

私たちは行くよ 私たちは行くよ

私たちサタワルの女が行くよ
陰核を売りに 小さな小陰唇を集めて

私たちが行くよ

私はカヌー小屋の前へ行くだろう

私の可愛いAさんと逢うために

私はあの男の前で腰を振って見せるだろう

私の腰をAさんの口につけるために

するともうあの男の口は淫らな臭いがして

あの男の口ひげはポロポロと抜けるだろう

私の腰をあの男の鼻にすりあげてすりさげ

淫らな臭いをすりつけてやる

私の陰腔の中で 何ていい音がする

あの男の舌なめずりの音だろう

おまえさんは雨着が着たいの

私の性器の上のたれさげで

私の性器の上のたれさげで

外套を一つ縫いましょうか

この歌は道中でも歌われるが、カヌー小屋へ来て女たちが一列になり、食べ物を手渡す時にも合唱される。客人の一人一人の名前を歌い込みながら、歌詞に合わせて動作をつける。腰をくねらしたり、前後に動かししたり、股を広げて腰布を下したり、性行為を連想させるしぐさをする。客人がその挑発にのって女の身体に手を触れたり、また腰布の下に手を差し入れたりすると、女たち数人がその男を取り囲み、性器を

男の顔に直接つけるのである。その性的攻撃の後で女たちはゲラゲラ笑う。これは女たちの挑発にのった男が、「サタワルの女に辱められた」ことを意味する。男にとっては「不名誉な行為」をしたことになり、評判を立てられるのである。その不名誉な評判は、サタワルの男たちがその男の島へ行った時に彼の女性キョウダイによって仕返しされる。

このような性的表現による客人の歓迎とは別に、客人は訪れた島で女性と性関係をもつことが自由とされている。それは客人の甲斐性にもよるが、とくに著名な航海者は女性の方から誘われることがある。しかし、客人と未婚の娘や寡婦との関係が発覚しても問題にならないが、既婚女性との場合は慎重でなければならぬ。姦通とみなされ乗って行ったカヌーを没収されたり、喧嘩になったりすることもある。また、サタワルの独身男性は、性を目的で他島へ航海するとも言われる。

「女性の貢献」は、他島からの客人に食料を支給する慣行であるとともに、サタワル社会において厳しい禁忌である女性の性的表現が公の場で許容される機会でもある。前節で述べたように女性は自分の男性キョウダイに対して多くの性に関する禁忌が課せられている。前掲の歌詞の内容などは男性キョウダイだけでなく島の男性一般にも、日常的生活の場で耳に入れてはならない性格のものである。それが他島の男性との間では何の規制もなく、自由にそして積極的に振舞うこ

とを女性に期待するのである。したがって、この慣行の特徴の一つは、女性が島社会の公的場面では性に関する忌避行動を遵守しなければならぬのに、他島から客人を迎えた局面では客人に無礼講的な冗談関係として許されることである。もう一つは、島社会で女性が彼女の男性キョウダイの性的凌辱をはらすことに責任をもつが、その責任は他島で起きた性的事象にも適用される点である。

むすびにかえて

本稿ではサタワルを中心にトラック語系社会の性に関する事象を記述してきた。調査資料が不十分であり、また体系的に収集されてないために、「性の民族誌」と呼べる内容に至っていない。ここでは、この社会の性文化にみられる特徴的な側面を指摘してむすびにかえたい。

第一は、思春期および結婚生活を通して未婚の男女間として配偶者以外の異性との関係が大らかであることである。ただし、秘密裡に性行為を行なうという条件を加える必要がある。万一、既婚者が愛人関係にある相手との性交現場を発見された場合には、当事者の集団はすべての動産を没収されるという経済的制裁が設けられている。

第二は、異性キョウダイ間で性器の部位名称、性行為や愛人などを示す言葉を口にしたり、局部を露出することは、厳

しい禁忌とみなされる点である。それを犯すと超自然的制裁が加えられる。そして、男女とも他者から自分の異性キョウダイの性に関する事柄を言われた場合、発言者ないしその異性キョウダイに対して性的行動ないし表現によって仕返しをする責任がある。男性間では暴力沙汰に発展するし、女性間ではもっとも厳しい禁忌である彼女自身の性器を露出するという手段で相手を攻撃する。

第三は、女性は自分の島での生活において、通常禁じられている男性に対する性的行動(表現)を、他の島の男性との間では積極的に実行することが許され期待される点である。

以上で述べた三点についての文化的、社会的意味は、目下のところ詳細に説明できていない。今後の課題である。

〔付記〕

本稿に書くにあたってトラック語の表記法の教示および情報の提供を東京学芸大学助教教授杉田洋氏から受けたことを記して感謝の意を表わしたい。

注

- (1) サタワル社会の関係名称はハワイ型体系である。したがって、個人にとって同じ母系出自集団の成員で同世代の者はすべて実の兄弟ないし姉妹と同一の名称で指示される。また、母方の交叉イトコ、父方のイトコも右と同様である。

ここではそのカテゴリーにある親族を「キョウダイ」とカタカナで表記する。キョウダイだけでなく同一母系氏族成員との性関係も禁忌である。

(2) 父・娘、母・息子の間にも交接、抱擁、愛人などの言葉を使用することが禁止されている。また、女性は父や息子の前で猥褻な歌を歌ったり、彼らに腿の入墨を見せることが禁忌である。

(3) ハイビスカスやバナナの繊維で織られる腰布 (sarung) は、サタワル社会において「貨幣」として機能する。賠償の代、伝統的知識の習得のお礼、家やカヌー建造の謝礼などとして不可欠である。

(4) トラック社会には、男性が植物の樹液を混ぜ合わせて芳香の「香水」をつくる伝統的知識がある。女性がこの香水に魅せられるとそれを持つ男性のことが頭から離れず、男性の性的要求を快く受け入れる。それを作る知識は秘密であり、その習得には多額の支払いが必要となる。一人の長老の経験では、自分の妻を三カ月間、その知識保有者に提供して、習得したとのことである。現在でも、最低一、〇〇〇ドルの謝礼を払わなければならない。

(5) 姦通は愛人関係にある男女の妻ないし夫のリニージ成員によって性交現場を目撃された時にのみ没収事件になる。目撃者は、男女が姦通したことを大声でわめきながら彼らのリニージの居住地へ走る。その声を聞いて目撃者の全リニージ成員が姦通した男女のリニージ居住地に押しかけ、手当たりしだいに家財を「略奪」する。持ち運べる財は没

収し、大型カヌーやタロイモ田には差し押さえるの標識をつける。他方、姦通当事者のリニージでは、早急に腰布を集め、島の酋長のところへ持参し、仲裁を依頼する。腰布は五〇―一〇〇枚であるが、その量によって差し押さえるを解除するか否かが決められる。姦通当事者の夫ないし妻のリニージ成員以外の人が二人の性交現場を発見しても他言しないのがルールである。しかし、姦通のことが噂になって、男が恥ずかしくなり島からカヌーで逃げ出した例もある。

(6) サタワル社会の慣習法に基づく離婚は、先に再婚した方が以前の配偶者に腰布を二〇―三〇枚贈ることで成立する。この例の場合は、再婚の意志をもって妻でない女性と同居したにもかかわらず、離婚の代を支払ってないために起こった。サタワル社会の愛人関係は、単なる一時的な関係と、当事者に結婚(再婚)の意志のある関係とによって、没収事件になるか否かが決定される。一時的な愛人関係は大目に見られる傾向がある。また、既婚男性と未婚女性との愛人関係も、結婚を前提としていない時には、没収事件を生起しない。

(7) 女性が客人に対して料理を提供する慣行は現在でも継続しているが、集団的に性的挑発をする行為はキリスト教の受容後に廃止された。しかし、女性が生殖器を露出する行動はなくなつたものの、性的な言葉で相手を罵倒することは行なわれている。そして、男性キョウダイが性的な言葉で揶揄された島の男がサタワルに来た時に、サタワルの女性がその男に仕返しをするも行なわれている。

文 献

- GLADWIN, T. & S. B. SARASON 1953 *Truk: Man in Paradise*, Viking Found Publication in Anthropology No. 20, New York: Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research, Inc.
- GOODENOUGH, W. H. 1949 "Premarital Freedom on Truk," *American Anthropologist*, 51: 615-620.
- GOODENOUGH, W. H. & H. SUGITA 1980 *Trukese-English Dictionary*, Philadelphia: American Philosophical Society.
- 土方久功 一九八四 『ミクロネシア・サテワヌ島民族誌』東京、未来社。
- 石森秀三 一九八五 『危機のロスキロー——ミクロネシアの神々と人間』東京、福武書店。
- 須藤健一 一九八〇 「母系社会における忌避行動——ミクロネシア・サタワル社会の親族体系」『国立民族学博物館研究報告』五巻四号、一〇〇八—一〇四六頁。
- 一九八六 「母系社会における子どもの養育——ミクロネシア・サタワル島の事例分析」馬淵東一先生古稀記念編集委員会編『社会人類学の諸問題』東京、第一書房、一三九—一五九頁。
- SWARTZ, M. J. 1958 "Sexuality and Aggression on Ronomum, Truk," *American Anthropologist*, 60: 467-486.